

## 速報

九州の島嶼における中型哺乳類相の復元\*<sup>1</sup>安田雅俊\*<sup>2</sup>・上田浩一\*<sup>3</sup>

安田雅俊・上田浩一：九州の島嶼における中型哺乳類相の復元 九州森林研究 69：119－120, 2016 九州の沖合に位置する島嶼には現存する中型哺乳類相が貧弱であるという共通の特徴がある。そこで、文献資料にもとづき過去の中型哺乳類相の復元を試みたところ、タヌキ、アカギツネ、ニホンテン、カワウソ、ニホンノウサギは、かつて分布し、後に絶滅したことがあることが明らかとなった。本研究の結果は、九州の島嶼にはかつて多様な中型哺乳類相が成立していたことを示すとともに、島嶼生態系の脆弱性を示唆するものである。

キーワード：島嶼生態系、生息分布、地域絶滅、狩猟圧

## I. はじめに

日本産哺乳類の多くは、有史以前から、毛皮、食肉、骨、薬種等をえることを目的として盛んに狩猟されてきた。それは、個体群規模が小さな小面積の島だけでなく、北海道、本州、四国、九州といった大面積（ $\geq 10,000 \text{ km}^2$ ）の島（以下、本土）においても、中大型種の地域絶滅を引き起こした（1, 2）。近年、狩猟圧の低下とともに多くの種で個体数が増加に転じ、なかでもイノシシやニホンジカといった自力で海を泳ぎ渡ることのできる大型種では、かつて分布していた島嶼への再侵入が顕在化している（3）。一方、自力で海を泳ぎ渡る能力が低い中型種の多くは、個体群がいったん絶滅した島嶼への再侵入を果たしていないように見える（1, 2）。そこで本研究では、九州の沖合に位置する中程度の大きさ（面積  $100\text{--}1,000 \text{ km}^2$ ）の3島を対象として、文献資料にもとづく過去の中型哺乳類相の復元を試みた。本稿では、これらの島々が、かつては、より多様な中型哺乳類相を擁していた可能性を指摘する。

## II. 調査地と方法

約1万年前まで九州本土と陸続きであったと考えられている壱岐諸島、五島列島、天草諸島のうちの面積が最大の島（壱岐島  $135 \text{ km}^2$ 、福江島  $326 \text{ km}^2$ 、天草下島  $575 \text{ km}^2$ ）を研究対象とした（以下、3島）。さまざまな文献資料（貝塚等から出土した動物遺存体の分布、過去の生物相の記録等）から中型哺乳類13種（表-1）の分布情報を抽出した。九州本土と天草諸島については最近の報告（3-5）を参照した。なお、外来種のマングース類と九州における過去の分布が不明なニホンリス（4）は除外した。

## III. 結果と考察

現存する中型哺乳類相（表-1）についてみると、在来種の種数は、面積が小さい順に、壱岐島2種、福江島2種、天草下島3種、九州本土8種であった。一方、復元された過去の中型哺乳類

相（表-1）は、それぞれ5種、6種、4種、10種であった。今後、新たな資料の発見により、過去の種数が増える可能性はある。種の絶滅率はそれぞれ60%、67%、25%、20%であった。オオカミとカワウソは九州各地から過去に記録があり、後に絶滅した（4, 5）が、3島ではその他の中型種も絶滅したことが明らかとなった。以上のことから、3島にはかつて、現在よりも多様な中型哺乳類相が成立していたことが強く示唆される。

外来種についてみると、九州本土に分布する4種のうち2種（シベリアイタチとクリハラリス）が、3島のうち2島に分布している（表-1）。導入の時期と経緯は種によって異なる。福江島と天草下島に分布するシベリアイタチは、戦後、ネズミ防除を目的として導入された個体に由来する可能性がある。壱岐島と福江島に分布するクリハラリスは、1980年代以降、観光施設から逸出した個体に由来するとみられる。

以下では3島の在来種に着目する。3島に共通して過去の分布情報を欠く種は、オオカミ、ニホンアナグマ、ニホンザル、ムササビの4種であった。

タヌキは壱岐島と天草下島に現存する。福江島では縄文時代後期（約4,500-3,300年前）に分布した（13）が、後に絶滅したとみられる。現在は、五島列島全域に分布しない。

アカギツネは江戸時代の壱岐島で記録がある（7）が、後に絶滅したとみられる。福江島（12）と天草下島（3）では確実な記録がない。

ニホンイタチは3島に現存する。1907年に福江島で採集された標本が大英自然史博物館にあり（川田・下稲葉、私信）、1930年代にも記録がある（11）。しかしその後、ネズミの防除を目的として五島列島の複数の島にイタチ類が導入された（8）ため、現存個体群の由来は不明（6）である。遺伝学的研究が望まれる。

ニホンテンはかつて3島に分布したが、天草をのぞき絶滅したとみられる。弥生時代（約2,000年前）の壱岐島に分布し、1930年代の福江島（11）から記録がある。

カワウソは、江戸時代の壱岐島（7）、1930年代の福江島（11）で記録がある。ある程度は海を渡る能力があるため（14）、かつては九州本土から遠くない島嶼を利用していた可能性がある。天

\*<sup>1</sup> Yasuda, M. and Ueda, K.: Reconstruction of medium-sized mammal fauna on offshore islands in Kyushu, southwestern Japan.\*<sup>2</sup> 森林総合研究所九州支所 Kyushu Res. Ctr., For. & Forest Prod. Res. Inst., Kumamoto 860-0862, Japan.\*<sup>3</sup> 五島自然環境ネットワーク Goto Natural Environment Network, Goto, Nagasaki 853-0013, Japan.

表-1. 九州近海の3島における中型哺乳類の分布状況.

●: 現存, ○: 絶滅 (過去の生息情報はあるが現在は不在), ×: 現存せず過去の生息情報なし.  
 ■: 外来種, ◆: 在来種か外来種か不明, +: 局所的分布.

面積 (km <sup>2</sup> )	タヌキ	アカギツネ	オオカミ	ニホンイタチ	シベリアイタチ	ニホンテン	ニホンアナグマ	カワウソ	アライグマ	ニホンザル	ムササビ	クリハラリス	ニホンノウサギ	文献
目	食肉目	食肉目	食肉目	食肉目	食肉目	食肉目	食肉目	食肉目	食肉目	霊長目	齧歯目	齧歯目	兔目	
科	イヌ科	イヌ科	イヌ科	イタチ科	イタチ科	イタチ科	イタチ科	イタチ科	アライグマ科	オナガザル科	リス科	リス科	ウサギ科	
壱岐島	135	●	○	×	●	×	○	×	○	×	×	×	×	(7, 10)
福江島	326	○	×	×	◆	■	○	×	○	×	×	■	●	(6), (10, 13)
天草下島	575	●	×	×	●	■	●	×	×	×	×	×	○	(3, 5)
九州本土	36,783	●	●	○	●	■	●	○	■	●	●	■+	●	(4, 6)

草下島からは過去の分布情報はないが、志岐神社にカワウソの足がある (14)。天草諸島における過去の記録の精査が望まれる。

ニホンノウサギは福江島に現存する。縄文時代中期から後期初頭 (約 5,500-4,500 年前) の天草下島に分布した (3) が、後に絶滅したとみられる。壱岐からは記録がない。

全国的にみて、アカギツネ、ニホンテン、ニホンアナグマ、ニホンザル、ムササビ、ニホンノウサギは、多くの 500 km<sup>2</sup> 未満の島に現存しない (1, 2)。これらの種は毛皮や食肉としての価値が高いため、かつて分布していたとしても、過度の狩猟圧によって、個体群の規模が小さな島嶼では絶滅しやすかったと推察される。

一方、タヌキとイタチ属は、上記の中型哺乳類と比較して、島の面積の影響を受けにくい (1, 2)。これらの種がもつ食性の幅広さは、島嶼という限られた生息地における個体群の維持に有利に働いた可能性がある (3)。

本研究により、タヌキ、ニホンテン、カワウソ、ニホンノウサギは、研究対象とした3島のうち2島ないし3島にかけて分布したが、1島以上で絶滅したことが明らかとなった。これは島嶼生態系の脆弱性を示唆するものであり、今後、適切な保全と利用が望まれる。

謝辞

本研究は森林総合研究所の研究課題 (G 112) として実施された。本研究をすすめるにあたり、有益なコメントをくださった荒井秋晴博士、川田伸一郎博士に深く感謝する。

引用文献

- (1) 石井信夫 (1987) 遺伝 41 (12) : 36-40.
- (2) 石井信夫 (1996) 瀬戸内海 6: 46-49.
- (3) 安田雅俊 (2015) 熊本野生生物研究会誌 8: 1-6.
- (4) 安田雅俊 (2011) 九州森林研究 64: 26-29.
- (5) 熊本野生生物研究会 (2015) くまもとの哺乳類, 320 pp, 東海大学出版部, 秦野.
- (6) Ohdachi, S. et al (2015) Wild Mammals of Japan (2nd ed.), 506 pp, Shokado, Kyoto.
- (7) 盛永俊太郎・安田健 (1993) 壱岐国土産考, 享保元文諸国産物帳集成第 XVIII 卷 (補遺篇 II), 463-500, 科学書院, 東京.
- (8) 山口鉄男 (1968) 哺乳類, 長崎県の動物, 1-38, 長崎県理科教育協会, 長崎.
- (9) 山口鉄男 (1977) 壱岐の哺乳類, 壱岐の生物, 233-238, 長崎県生物学会, 長崎.
- (10) 松尾公則 (2010) 長崎県の哺乳類, 173 pp, 長崎新聞社, 長崎.
- (11) 久保清・橋浦泰雄 (1934) 五島民俗図誌, 548 pp, 一誠社, 東京.
- (12) 山口鉄男 (1981) 五島の哺乳類, 五島の生物, 139-148, 長崎県生物学会, 長崎.
- (13) 宮路淳子 (1998) 宮下貝塚出土の動物遺存体, 富江町文化財調査報告書第 1 集. 宮下貝塚, 43-49, 富江町教育委員会, 富江.
- (14) 安藤元一 (2008) ニホンカワウソ, 233 pp, 東京大学出版会, 東京.

(2015 年 11 月 2 日受付 ; 2016 年 1 月 6 日受理)